
ブラインドサッカー

シー様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラインドサッカー

【Nコード】

N4168P

【作者名】

シー様

【あらすじ】

スポーツを通して生きがいを見つける話

盲目の少年

「おい！！こいつの眼、いつちゃってるぞ！！怖~~~~~」

また聞こえた、僕の悪口が・・・

いつものことだから・・・と、思い冷静に振舞をうとするけど、やっぱり気分が悪い。

どうして僕だけが、こんな目にあわなくてはいけないのだろうか？

僕は先天的な病気で成長する程に目が見えなくなった。

事前に病気を理解していたから、病気を受け入れる覚悟はできてた。でも、人の視線までは覚悟はできてなかった。

でも、我慢しよう。

母さんに迷惑を掛ける訳にはいかない。

これから僕は一生、家族のお荷物になるのだから、こんな事で弱音は吐けない。

でも駄目だ。

今日も言われた。

耳だけに頼る生活になってから、遠くの人の話し声まで聞こえてしまう。

もしかして僕を馬鹿にしているのだろうか。

悔しい。なんで、僕ばかりが底辺を味わわなければならないのか。神様は卑怯だ。

どうして、僕ばかりにこんな仕打ちをするんだ。

死のう。死ねば楽になれる。

どうせ生きてても、お荷物にしかないのだから・・・

自殺

少年は窓から飛び降りようとベランダに出た。

母親が買い物に出かけている隙を見計らって飛び降りるつもりである。

。

救急車のサイレン音が街中に響いた。

だが、少年は、まだ、生きている。死んでない。
なぜなら少年は飛び降りていないからだ。
救急車のサイレン音を聞き躊躇したのだ。

己が救急車に運ばれて、もし、助かってしまった場合の家族への迷惑を考慮したのだった。

親思いの少年だからこそ、自分の弱さを打ち明けられなかった。
死にたい。

でも、本当は生きて親孝行がしたい。

それができない彼は、死ねない苦痛と生きる苦痛の狭間で葛藤し、
ただただ泣き崩れた・・・

10年後

彼は役場にて働いていた。

盲目の障害者でも可能な仕事を頑張っている。

働き出して3年にもなり、仕事には慣れたが、松葉杖を付きながら自宅と仕事場の往復は辛い。

盲導犬が居れば楽になるのだろうが、そう安々と手に入るものでもないのは彼が一番自覚している。

親に迷惑を掛けないで、ある程度は自立できている。
できているが、彼には生きがいが無い。

盲目であるから遊ぶ事も困難だし、何より遊び相手が家族しかない。

親の手を煩わせるのは嫌で、やはり彼は、今でも生き死にばかり考えていた。

そんなある日、母は彼に言った。

「夕君、子供の頃、サッカー好きだったよね」

彼は母がなぜ、そんな事を聞くのか理解できなかった。

サッカーは確かに好きだったが、それは、あくまで過去形である。

そもそも盲目の自分にスポーツの話題を振る意味が全く判らないのである。

「実は盲目でもサッカーができるらしいの。ブラインドサッカーって言って目隠ししてやるんだって。健常者も盲目の人と一緒にできるスポーツなんだって。」

彼は困惑した。

母に氣を使われているのを 迷惑を掛けていると感じていた。
罪の意識が彼に訴えかける。やはりお荷物だと・・・

その自己嫌惡に満ちた顔を知ってか知らずか、母は話を続けた。

彼はその話を聞いている様で聞いていない。

ただ、母の希望に沿う様に流され、サッカーチームの居るグラウンド
に立っていた・・・

10年後（後書き）

書けるかどうかは判りません。
ここまで、行き当たりバッタリ

居場所

彼、有里夕は楽しくなった。

チームも監督も夕を快く受け入れてくれ皆が笑顔で彼の練習に付き合った。

けれど夕にとっては楽しくない。このサッカーの何処が面白いのか全く判らないのである。

夕自身は気付いていないが、彼にとっては皆の期待を裏切らない事が全てであった。

己が不要で人に迷惑を掛けるという長年の思いが深層意識、無意識の領域下に深く刻まれていたからである。

彼は周囲からプレッシャーを感じる中で、ボール遊びに対して全く気持ちが向かない。

仲間達に優しく監督に優しくされるされるが、それが逆効果で夕に働きかける。

夕は作り笑顔を振りまいていただけであった。

しかし、夕自身が、その作用について全く気付いていない訳でもない。

作り笑顔で嘘をついても意味が無い。止めたいならその意思を明確にしなければ成らない。

けれど、一度、作ってしまった作り笑顔を壊し、親、チームの皆の気持ちを裏切る訳にはいかない。

彼は、ここでも自分の居場所は作れないのだと自覚した。

少年サッカーチーム

横浜リトルジュニアの名門サッカーチーム、今期のリーグ戦を優勝したメンバー一行は、遠征バスで地元へと帰る途中であった。

その際、バスのエンジンがトラブルを起こしてしまい、メンバー達は足止めを食らった。一行は、別のバスが手配され、それが到着するまでの間、待たされる事となった。

その待ち時間の間に、メンバーの内の一人が、退屈しのぎに持ち場を離れウロウロし始めた。

道路の反対側を横切り、大きなビルの裏路地に入った。なにやら叫び声が止め処なく聞こえ、その先を抜けていく。ビルを抜けた煤で行くとその瞬間、彼の目に飛び込んだ。目隠しをしながらサッカーをしている人達を見た。

彼の目には、彼らのその光景が異様に映った。と同時に好奇心を駆り立てられた。

彼は恐る恐る見学をしていた。

するとサッカーコートの中に居た一人の年配婦人に声を掛けられた。「君も、やってみない？」

彼は、驚いた。

なぜ、いきなり誘われるのか、なぜ自分なのか・・・

困惑する彼を尻目に年配婦人は説明を始めた。

「このサッカーはね、ブラインドサッカーっていう列記とした国際スポーツなの。参加者は誰でも良くて、健康な君でもいいし目の見えない障害者でも構わない。この競技は世界大会も行われてて、昨年は日本代表がブラジルと優勝戦を争ったのだけれど、まったく敵わなかったのね。流石はサッカー大国ブラジルという感じがな。」

ほら、このボールを見て。　転がすと鈴の音が鳴るでしょう。　この音の位置を聞き取りボールを追いかけるのがこのゲームの要なのだけれど、ブラジルはボールを転がさなかったの。　転がさず空中に浮かせてパスを出す技術を習得していて、鈴の音が聞こえなかった。　ほら、見て、転がすと音は鳴るけれど、ボールが空中にあると、音が聞こえないでしょう。　それで日本は全くボールも触らせてもらえなかった。　ブラジルのプレイ映像は何度か分析していたけれど、まさか、鈴の音を鳴らさないでゲームをしていたなんて、私達は想定外だったの。　本当に悔しい。　今からチームの技術UPを根本から考え直さないといけないのね・・・」

年配婦人は困惑している少年を置いてけぼりにして、自分の世界を語った。

しつこく語った。

その勢いに飲み込まれた彼は、帰れなくなってしまった。

年配婦人の笑顔に誘われる様に、ブラインドサッカーをやさらせる事となった。

僕は最初、ブラインドサッカーはつまらなさそうと思った。けれど、やってみると以外にも面白いものだと感じた。見えない恐怖と戦うスリルが楽しい、思うようにパスが繋がると、自分の新たな力を発見した気分になる。危なく人にぶつかりそうになっても、誰かが救助してくれる。知らない事ばかりで楽しい。

彼がそうしてサッカーに熱中していると、仲間達が彼を探しに来た。

「おい！ 裕ー！！！」

だが、仲間達の声は彼には届いていない。

「おい！ これなんなんだ！？」「目隠ししてサッカーしてるぞ」
「あ、オレこれ知ってる障害者がやるスポーツだよ。ほら見て」

ベンチに向かって少年は指をさした。

通常とは違うの目の色と形をした、ある人に向かって。

夕は、声が聞こえた。

だけれど、自分の悪口を言っている様な気がして苦痛していた。けれど、それは被害妄想だと思い、自分に言い聞かせていた。するとその声の主たちは、自分の方向へとどんどんと近寄ってきた。声の内容を聞きたくないが、音が飛び込んでくる。

「何してんだよ裕。さっさと帰ろっぜ。もう、バス来てるし、監督がぶち切れてるぞ」

「あ、御免！ でも、これ楽しくってさ、つい、夢中になっちゃって・・・」

ユウと呼ばれた少年は、年配夫人に、挨拶をした後に帰って行った。

夕の気持ち

自分と同じ名前・・・

声は若いから小学生か？

「監督」と言っていたら、何処かのスポーツクラブに所属しているのだろう。

そういえば僕も子供の頃はサッカーしてたっけな。

どんくさくてチームのメンバーに迷惑かけて・・・

続けたかったけれど、目が見えなくなる訳だし、ちょっと遊んでみただけ。

あの頃が一番、幸せだったな・・・

だめだ！ この主人公に生きがいを持たせる展開に持っていけない！

しやあないので、書き換える。

<裕と呼ばれた少年は仲間の迎えが来なくて、夕とボールの奪い合
いのゲームをする>に書き換える

対決

婦人年配者は夕の元へやってきて言う

「ちょっと手伝ってくれるかな？」

夕は困惑しながらも、年配者に手を引かれて、裕の元へとたどり着いた。

「さあ、少年よ、このオッサンが今から君のキープしてるボールを奪う。君はこの半径、2メートルの円から出てはいけない。目隠しは無くても構わないよ」

2人は困惑しながらプレイした。

裕は目隠ししなければ絶対に負けないと信じてたし、夕も見えてる人に勝てるとは思わない。

案の定、2人の考えは的中した。
だが、ゲームは終わらなかった。

長い時間、裕はボールをキープし、長い時間、夕はボール奪おうとした。

その結果、2人はそこで体力のみを使い朽ち果てた。

裕が諦れて円の外に出てしまったとき、年配婦人は高らかに

「勝者夕君ーーーーー！！！」と言った。

「円から出たのだから、君は負け！」

この子供じみた発言に、裕は笑いがこみ上げた。

また、夕自身も、ここまであからさまに障害者に肩を持つとする年配者の態度に笑いがこみ上げた。

そして、二人は時間を共有した。

夕と裕、互いの同じ名前であった事が偶然判り、他人とは思えなくなってしまうたのだった。

自己紹介をした。裕は自分がリトルサッカーのストライカーである事を伝え、裕にせがまれ、なぜ、視力を失ってしまったのかを話した。

裕は、楽しいひとときが過ぎた事に満足した表情で、挨拶の後、仲間の元へ帰っていった・・・

それから時が流れ10年後、夕は何気なくテレビの音を聞いていた。プロサッカーの試合の生中継であり、その放送の中にて裕の名前を耳にした夕は、「がんばれ」と心の中で祈った。

対決（後書き）

10年後じゃ駄目！！

それに、これは生きがいと呼べるものか不明だ！
もう一回、書き換える！

ミス（前書き）

やっぱり、書き換えるのは止めました m ((m

ミス

裕と夕は自己紹介の段階で語り合った。
その時

裕「僕は将来プロサッカー選手になって世界に行くんだ！ だから、オジサンも、このブラインドサッカーで世界に行つて。

夕は困惑した。楽しくてしているサッカーでは無いにしろ、今日が楽しかったにせよ、止めたい思いで一杯だったからだ。
その気持ちを少しだけ打ち明けた。

夕「無理無理、毎日大変だし、遊び程度だし、そこまで本気にならないよ。

そのさえない回答に裕は問いを出した

裕「何が大変なの？

その問いに夕は困った。

何も言えなかった。

子供に、自分の可愛そうな日常生活を伝えるのも良い事が判らないし、何より、弱音を吐いてる様に思われるのが嫌だった。

そして彼はつい、裕に「よし、判った。おじさんも、頑張つて世界を目指す！」

と、言ってしまった。

ノリに合わせただけであるものの、彼はそれが最善の選択肢に違いないと思つた。

夕が笑顔でサッカーコート去った後、一人のチームメイトが声を掛けてきた。

「おまえ、そんなにヤル気あったんか！ よし、これから特訓しよう」

夕は、しまったと思った。またも、自分のミスでプレッシャーの渦に飛び込んでしまったのである。

もう逃げられない。チームは士気があがってしまったのだ。

彼はレギュラー入りする為に、先輩のしごきに耐える羽目になったのだ・・・

ゼロ

夕は先輩のシゴキに耐えられなくなった。

そもそも彼はサッカーを止めたいと思っっているのだが、どうしても言えない。

時間が経つ程に言えなくなる。

そりゃあ夕自身も本当に嫌なら最初からサッカーなんぞしていない。期待してた。何か生きようと思えるやりがい得られるかも知れないと思っていた。だからこそ、彼はトレーニング耐える。

しかし、やりがいは得られない。

練習のキツさは障害者といえど、流石に世界を目指すだけのレベルである。

勝つための努力はできるかぎりするのが勝負士なのだ。

その勝負士になり切れない彼は、いつも、いつ止めようか切り出すべきか苦悩していた。今日こそ、今度こそ、そうやって夕は言わなければならぬ筈の言葉と葛藤した。

そして強い決意を固め先輩に言おうとしたその時、ゼロを吐いた。

夕は気がちっちゃ過ぎたのである。

先輩は、突然のゼロに意味が判らないでいる。

確かに顔が真っ青で調子悪そうに見えていたし、夕が何かを言い出そうとしていたのは判っていた（読者だけ）

でも、それが止めたいと言いたかったとは、先輩は全く気付いていない。

「お前、大丈夫か?? 何か悪い物でも食ったんか??」

心配される夕。

夕は情けなくなった。「止めたい」の一言さえ言えない自分の気の小ささに、自分自身が悔しくなった。

思わず泣いた。

自殺未遂以来に涙を流した。

メンバー達や監督は何事かと驚き、夕の周囲に集まった。

休憩室に連れて行く為、肩を貸そうと手を差し伸べてきた手を振りほどいた。

皆が困惑しているさなか、夕は泣きながら、洗いざらいをぶちまけた。

「ヒック、ヒック、ハア、ハア、ゼエ、ゼエ、や・・・やべ
た
い・・・」

そのブチマケル気持ちの波は、彼にとって世界の終焉を意味する位の巨大な大津波に飲み込まれるが如くであった。

絆

「オ、オマエ、そ、そんなことで泣いてたのか・・・ しかもゼロまで・・・」

と、皆が感じたのは当然の事。

でも、夕にとつては、そんな事ではなかった。

自分の気持ちを主張せず我慢する人生を長年歩んでいた為に潜在意識に習性としてこびりついていたのである。

弱音を吐く＝死

なのである。

彼自身は死という名の恐怖を受け入れた瞬間に今、居るのである。

追い詰められすぎて、思考回路が全く正常でないのだ。

だが、当然、彼はメンバーに殺される事などない。

皆は夕に優しくした。

「止めたいなら止めてもいい。というか止めるべきだ。

「今まで気付いてやれなくて御免」

彼は、まさかという感じである。

とがめられる、あるいは殺されるとも思っていたのに優しくされて、とても嬉しかった。自分は本音を出しても良かったのだと悟った。

涙が自然と引いていく。

そして、ある一言で、再度、彼の涙腺は崩壊する。

「お前、我慢強いな。我慢強さなら世界一じゃねえの？」

その言葉を聞いた彼は人生全部を思い出した。

先天性の病で視力を失うと判ってからというもの、人生に対して全てを遠慮して生きていた。我儘を言わずに我慢するのが当然だった。嫌な事があっても、怪我をしても、いじめにあっても、ケンカに負けても、自殺未遂しても・・・

その我慢強さが世界一だと言われた時、夕は自ら納得した。

あまりの我慢人生に、これほど耐えた人間は居ないと自分で自覚した。

我慢力なら誰にも負けないという誇りを得た。

夕は何時も思ってた。こんなに我慢するの自分だけだと、いつも思ってた。

でも、いつも本音が出せなかった。大したこと無い筈なのに、言えない自分に苦悩していた。

その苦悩と葛藤に費やしたエネルギーの量を思い出した、その瞬間、自分への自信の無さが消え去り、大きな自信が付いた。

何年ぶり自信なのか、彼は思い出せない。

もしかすると、生まれて初めて自信を持つという事が出来たのかも知らない。

誰よりも大きな自信が自分の中に芽生えたとき、体が急に軽くなった。

背中に100トン甲羅を背負っていた重みから開放されかのような気

分。

その余りの『楽』という感覚の嬉しさは、生まれて初めての様な体験。

彼はその嬉しさで涙を流した。

さっきまで、恐怖でピーピー泣いていた夕は、今度は嬉し涙で号泣したのだった。

全然、問題なし。ハッピーだ、

問題があるとすれば、この気持ちは作者にしか判らないということかもしれない。

きつと、メンバーも読者も理解できないと思う。

ともあれ、彼はサッカーを止めた。

自信と誇りを取り戻した夕は、意気揚々と自宅へと帰りましたとき、めでたし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4168p/>

ブラインドサッカー

2010年12月21日21時33分発行